［COMMUNION］
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

コミュニオン

東京教区時報［イースター号］

第２２号
（通巻１２５７号）
2015年4月5日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園3-6-18

《イースターメッセージ》

変えられて、起き上がる

司祭　セラピム　髙橋　顕

福音書によると、イエスの受難と復活の物語は、イエスが自分の死と復活を弟子たちに予告する場面から具体的に現れ始めてくる。そして、初めて弟子たちにその予告をした数日後、山の上でイエスの姿が3人の弟子たちの前で変わる。これは変容貌といわれる出来事である。マタイによる福音書では、17章1節以下に、そのことが記されている。十字架による死と復活に向かって、イエスはその姿が「変わった」。この「変わる」という言葉は、新約聖書が記された原文のギリシア語で、「メタモルフォオー」という単語が用いられている。これは英語のmetamorphosis（変形、変質、変容、変態）という単語にもなったが、このメタモルフォオーの元々の意味は、「本質は変わらないで、形が全く変わる」という意味である。そしてこの単語は新約聖書で4回だけ用いられているが、そのすべてが受身形で用いられている。つまり、神に「変えられる」ということが、聖書に記されているメタモルフォオーの意味である。イエスは受難の死と復活の前に、神によって姿を変えられた。それはなぜであろうか。弟子たちはイエスをそれまで、この世の権力者に替わる素晴らしい王になることを望んでいた。しかしイエスは本来、どういう者であるのか、ということを弟子たちに明確に示すために、神によってイエスの姿が変えられた。その姿は、神の栄光に輝く姿であった。だがしかし、栄光に輝く姿に変えられたことは、イエスだけの出来事ではない。

弟子たちも自身も、そしてまた私たち自身も、神の栄光を輝かす者へと、神によって変えられることが求められている。なぜなら、私たちはイエスに倣う者としてキリスト者に招かれたからである。

そしてまた、聖書に記されている「復活」という言葉は、聖書の原語であるギリシア語で、「エゲイロー」という単語である。このエゲイローの本来の意味は、「目覚めて起き上がる」という意味である。それは、死から命へと、自らの存在の立ち位置を全く変えることである。そして、イエスが復活（エゲイロー）したことは、全てにおいて、最大の変化である。したがって、イエスの復活は、変化できるという最大の確証であり、私たちが変化できるという最大の確約である。

イエスの変容貌とイエスの復活の出来事を捉えてみる時、「変えられて」「起き上がる」イエスの姿を見る。主イエスのご復活の喜びに与る今、私たちも「変えられて、起き上がる」希望が約束されていることを、改めて確信したい。そして、この「変えられて、起き上がる」という希望は、イエスによって示されたその最大の希望である、神の栄光に輝く、死から復活する、という出来事だけではない。私たちの今の現実にあって、私たちなりに、私たちが「変えられて、起き上がる」ことが、どうしてもなされなければならないことがある。その重大な一つは、私たちの東京教区の現状である。これでいいのか。本当にこのままでいいのか。主イエスはなぜ、変えられて、起き上がる姿を私たちに示されたのであろうか。それは、「あなたたちも私と同じように、変えられて、起き上がりなさい」と語っておられることではないか。

（東京聖三一教会・東京聖十字教会・聖愛教会牧師）

感謝 ― 退職に際して ―

祈りの法則は信仰の法則

司祭　山口　千壽

私の祈りのリストにお名前の上がっている方が、いつの間にか50名を超えていました。その中には、勿論、今の教会で礼拝の中でお名前を覚えている方や、今まで勤務した教会の信徒の方、同僚の教役者のお名前もあります。お会いしたことがないのだけれども、ご家族から祈って欲しいと頼まれて、加えている方もあります。これらのお名前を見ながら、朝の祈りを捧げることから一日が始まります。そしてその祈りの中で、私と家族を覚えて祈っていてくださる方があることを思い起こします。私の知らないところでも、毎日、祈っていてくださる方があるかもしれません。それらの祈りによって、私たち夫婦のこれまでの歩みが支えられてきたことを篤く感謝しています。私が聖職の道を、定年を迎えるまで歩んで来ることができたのは、毎朝の短い祈りの時間を守ることを自らのディシプリン（鍛錬、規律）として、司祭としての最低限の務めを日々の生活の中で生きるように導かれたからでした。

私は40代の初めから、約10年間、東京教区の専任の教務主事として教区事務所に通っていました。週の半分は夜の会議に出席しなければならず、当時、管理牧師として住まわせていただいていた東京聖マリア教会へは、寝に帰るような生活を送っていました。それでも、大斎節には、毎年、朝の祈りを1人の求道者の方と妻と3人で守ってはいました。その求道者の方が、ある年のイースターを迎える頃になって、これからもお祈りを続けましょうとにこやかに言うのです。そのため、復活祭を迎えたら、朝、少しゆっくりできるというささやかな〝夢〟は破れましたが、それに代る大きなお恵みをいただいて、御言葉に耳を傾け賛美の祈りを献げる生活を、それ以来、今日に至るまで続けることになりました。祈りの生活が毎日を整え、毎日の生活が、多少は信仰の土台の上に造り上げられるようになったかもしれないと感謝を深くしています。

同じマリア教会にいた頃のことでした。ある休みの日に、近くを散歩していて何気なく戸越八幡神社を訪ねました。人気がなく静かな佇まいを見せていました。見学がてら拝殿の近くに寄ってみたら、傍に小さな箱が杭のようなものに留められているのが目に入りました。何だろうと思って近づいてみたら、説明書きがあって、「お祈りをご希望の方は、題目を紙に書いてこの箱に入れてください。宮司が毎朝祈祷いたします」という趣旨のことが書いてありました。それを見てショックを受けたことを覚えています。

神社というのは、一般の方にとっては祭礼や宮参りなどで訪れることがあっても、普段の生活の中では足を運ぶ機会はほとんどないのではないかと、それまで勝手に思い込んでいたのですが、神社の宮司さんは、氏子の要望をそのようにして受け止め、地域の中に根付いて生きようとしていることを知ったのでした。

以来、パウロのようにまだ見ぬ教会の信徒の信仰生活に気を配って苦闘するまでに熱く祈るには至らないけれど、信仰のお仲間と「霊において共にいる」ことを心がけることが私の牧会生活の初志となり、続けてきたささやかな営みであったと振り返っています。

弱く、貧しいものへ

司祭　橋本　克也

私は１９７２年3月に横浜教区で執事に、翌73年にステパノ岩井克彦横浜教区主教によって司祭に按手されてから43年の聖職者としての道を歩ませていただきました。２０１１年東日本大震災の直後の4月に、東京教区に転籍させていただきました。皆さまに支えられて、今日の定年を迎えられたことは本当に感謝です。私は１９４４年8月に旧満州中国東北部の「ハルピン」で生まれ、2歳で引き上げて来ました。戦後の時代の中で育ちました。その後、中途の失明という特色ある人生が私に与えられました。中学生のとき、横浜聖アンデレ教会で林五郎司祭によって洗礼を受けました。教会生活はとても楽しかったと思えます。良い先輩や仲間にいつも恵まれていました。神学校も同様で楽しい時だったと思います。私は司祭として8教会の牧師と管理牧師をさせていただきましたが、最後まで未熟で怠りも、またあやまちも多く、懺悔に溢れる思いです。迷惑をおかけしてしまった方々に心からのお詫びを申し上げたいと思います。

ＮＣＣ日韓「障害者」交流セミナーでの寺園喜基先生の講演で、「障害者イエス」ということをお聞きして、驚きと同時に、感動と癒しの恵みを受けました。十字架の上に苦しみを受け、傷つけられ、痛みを負って弱さをあらわにして、しかも叫びながら死に到った救い主イエスに、新たに出会うことでした。「自分の十字架を負って従いなさい」と言われたイエスのみ言葉は、誰もが神の愛に招かれ、癒され、そして遣わされていることへの証しです。元気で、安定されているから祝福

されているのではなく、予想や経験できなかった弱さや、辱めや、悲しみ痛みを負わなければならない時にこそ、十字架の主は、共におられる救いの主です。復活の信仰の希望は、その死にあづかることでしょう。東京教区には、「いと小さな者のところに出かけてゆく」という宣教の主題があります。これはいつの時代にも変わらない福音宣教の指針です。しかし、私たちは考えさせられます。「いと小さい者」とは誰のことなのかと。先日病に痛み苦しんで教会に訪ねて来られた方に、「お前はいいよ、そんな恰好をして、皆から尊敬もされて、偉そうにして」、「見えないなんて嘘じゃないのか、これはなんだ」とメガネをはたかれ、持っていた白杖を取り上げられることがありました。一応の言い訳はしましたが、返す言葉の無い思いでした。思い上がりを潜ませた同情や憐みからの言葉や善行は、相手に伝わらないのです。この出来事は、定年を迎えるにあたって、神が私に、大切な気づきとしての声を与えられたのだと思えます。

キリストの教会であることは、小さささや、貧しさにこそ、喜びと誇りをみいだすことです。大きさや立派さへの憧れによって、解放された一致や、協力できることの喜びをを失っていることを自覚しなければならないのだと思います。福音宣教の「どこへ」を、もし私たちが見失っていることがあるならば、それは、自らの信仰を失っていることでもあるのでしょう。貧しい馬小屋で生まれ、弱さの中で死なれた復活の主に私たちが真の希望をもつ新たな信仰に、いつでも立ち返って行きたいと思います。

皆さまに感謝し、神の祝福をお祈りいたします。

30年を振り返って

伝道師　橋本　守

私は1967年立教を卒業し、森永に就職しました。当時今井司祭や3人の宣教師の先生方から「聖職になりなさい」と度々勧められました。しかし私の家は父が戦病死していて、祖父の資産で生計を立てていましたから早く卒業し就職したいと思っていました。それでも先生方の勧めは卒業後の私の教会生活を支え、力を与えてくださいました。以後20年間、私は教会委員・礼拝委員の役目を与えられ主日の礼拝と奉仕は生活の中心でした。しかし森永は全国に60を上回る工場や支店を持っていましたので転勤の可能性が常にあり、また祖母の介護や住居の問題等もありました。そんな中、三光教会での主日礼拝を休む事なく継続できたのは全く幸運でした。

1985年私は4つの部署を経て広告課長に就いていました。内田司祭は分餐者の必要から私を終身執事に推薦しました。教会委員会の合意を経、1986年終身執事を志願しました。ところが山田主教は将来司祭への道を閉ざさないよう「伝道師を志願しなさい」とのご指示でした。また現職のサラリーマンとの二役ですから「勤務は三光教会、勤務の内容は主日の礼拝に出席し奉仕する」という事でした。

既に20年間行ってきた事とはいえ、これからさらに30年間しかも勤務として継続する事が「本当にできるのか」と心配し不安もありました。しかし実状を知る私は断る事もできませんでした。そんな時、ある教会委員が「君は礼拝に専念すればよい」と言ってくださいましたので、私はそのようにさせていただく事にしました。

40代・50代、企業での業務はさらに広がり責任も増えていきましたが、半面時間的な自由度は幾分楽になりました。企業の中では3代の経営者に広報担当として仕えました。私の基本姿勢は明確で、企業人である前にキリスト者であり、たとえ自分や自社に不利益であっても会議等では、「置かれている立場にふさわしい発言や行動をとる」という事でした。しかし姑息な愛社発言や自己弁護発言もあり、また良心は「家に置いてくる」という人もいましたから実際にはたいへんでした。

キリスト者にとって二役を果すという事は社会や企業にあっても、生き方・在り方にその価値観や倫理観を問われる事になります。これにはかなりの厳しさが伴ないました。しかしこの点でも私は幸運でした。森永の企業倫理観は私の味方でありました。

30年間ですから、ずいぶん犠牲も払い不義理もしました。また嫌みや嫌がらせの言動も受けました。しかし多くの人から励ましや支援をいただいた事も忘れられません。

今ようやく70才になり伝道師の定年を迎えました。評価はわかりませんが、結果は祈り人としての教会生活と恵まれた企業人生の「幸福な二役」をおくれたように思います。

最後に分餐者について、30年前木村司祭の移動後、内田司祭は三光教会の実状と伝統を勘案し、また何よりも信徒を想い、礼拝奉仕に幾らか実績のあった私を専任分餐者にするのが適当と判断されたのだと思います。しかしこれからは男女を問わず、多くの「信徒の役割」として礼拝の活性化に寄与する事になるでしょう。

皆様ありがとうございました。心から感謝して無給の伝道師を定年します。

これからは一人の信徒として穏やかに緩やかに生きていきます。

司祭と語ろう（その14）

司祭　倉澤　一太郎（かずたろう）

今回は、1月31日に司祭按手を受けたばかりの倉澤一太郎司祭に、その紹介を兼ねて聖愛教会の信徒数名の方からお話しを伺っていただいた。

―　子どもの頃はどんなお子さんだったのですか

倉澤　とにかくよく本を読んでいましたね。図書館に入り浸ってカウンターの内側や書庫にもぐり込むのが好きでした。家の近くの東京諸聖徒教会の日曜学校に行っていた時も、礼拝堂を見下ろすコモンルームという部屋に古い本があったので、そこにもぐり込んで時間を忘れて本を読んでいました。

―　学校の銅像の二宮尊徳みたいだったらしいですね

倉澤　そう、歩きながら本を読むのが特技だったんです。母や祖母に連れられてデパートに行くと最初に本売場に行って一冊好きな本を買ってもらい、それを読みながら買い物にくっついて行きました。前から人が来てもぶつからないというのが特技でした。

―　どんな本を読んでいたんですか

倉澤　好きだったのは昔話ですね。日本や外国の昔話、ギリシャ神話、北欧神話、古事記などの日本の神話も好きでした。

―　大学では何を学んでいたんですか

倉澤　大学（立教）ではイギリス中世史でノルマン人の研究をしていました。大学院（東海大）でもノルマン人の活動を研究しました。テーマは《どうしてバイキングの末裔であるノルマン人達がたった一度の戦いで英国を征服できたのか》でした。

―　そういった勉強をしてきた先生が、なぜ牧師になろうと思われたのでしょう？

倉澤　そのような研究をして大学院を出た後「自分が研究して得たものは他人に伝えないと意味がない。伝えることを学びなさい」と指導教授に言われて予備校の講師になりました。予備校は結構空き時間が多かったので、その時偶然受けて採用されたのが高校をドロップアウトした子どもたちの指導をするサポート校の先生でした。そこが私の進路を大きく変える転機となりました。

―　それが聖職を目指すきっかけになったんですね

倉澤　はい、今まで知らなかったいわば問題児とくくられてしまう子どもたちと出会った時は「何が問題だったのだろう、本人たちに大きな問題はあるのか」と思いました。むしろ周りの大人たちとの交わりがうまくいかなかったために問題児と呼ばれるようになったのではないかと考え方が変わっていきました。子どもたちが補導されて停学になるという時にサポート校の経営側とぶつかって、「あの子たちをなんとかできないだろうか」と思ったことが人生の舵をきるきっかけになりました。

自分はこれまでとても恵まれた人生を歩んできたなと思った時、いったい一番良かったことは何だろう、私が青春時代を送ってきた時に居場所に困らなかったのはなぜだろうと思った時に「自分には立教のチャペルがあったな」と思い当たりました。そこに行くと仲間はたくさんいましたし、年齢層の広い会衆の人たちと交わることもできました。青春時代や思春期には普通は「大人が説教するのなんか聞けるものか」と反発したりするものですが、不思議とチャペルでは他愛ない世間話からおつきあいができます。それが私にとって年上の人が苦手にならない大きな要素になってくれたのではないでしょうか。ところがサポート校の子どもたちはそれが不幸にも壊れてしまっていて大人への信頼が無くなっています。どうすればこの子たちがもう少し楽な方に行けるのかなと考えた時に「教会という存在を教えてあげることができたらいいのかもしれない」と思ったのです。それが聖職の道に行く大きなきっかけになりました。

それまでは「聖職？そんな恐ろしいものにはとてもなれません」と言っていたのが「なろうか、目指そうか」となったのですから、私の心がひっくり返ったこのことが一つの大きな奇跡だったのかもしれません。

―　最近は聖職者であることが難しい世の中の状況だと思うのですが、目指したい牧会のありかたとか方向というのを教えてください

倉澤　今は何が良い方向かを模索しているところです。私は信徒訪問をする時、1日にお一人ぐらいになります。なぜかというと気がつくとそこで2～3時間くらいその方と一緒に居るからです。とにかく今目の前に居る人ととっぷりと話をしてしまいます。取り立てて心がけているわけではありませんが、いろんな人と話をしたり聞いたりするこ

とが好きなのでしょう。雑談のようなところからじっくり聞いていくとポロっと大事なことを教えていただいたりします。ご様子を見つつも一軒に2～3時間も居ますと、終わって出てくる時には逆に勇気や元気を貰ったりします。

ー 重いものをその方と分かち合って抱えてしまうこともありますよね

倉澤 そういうこともありますが、その方が私に話してくださったことがとても嬉しいことなのです。だから話してくださったのならば何とか一緒にその重荷を負いたいという気持ちになります。

ー 先生は執事職が長かったのですが私たち信徒はとても幸せだったと思っています。それというのも執事は信徒に近く、みんなのいろいろな細かい情報を得て代祷で憶えて祈るということをとてもよくなさってくださるからです

倉澤 それが聖職者の本分と思っています。でも信徒の情報を得るというのは皆さんのご協力あってのものです。

ー 先生はいろいろな教会をご経験されていますが、聖愛教会でもこんなことが出来たらいいなということはありますか？

倉澤 平日に楽しむ会とかがあればいいなと思います。聖書の会の時にはお茶を飲んだりしますが、お茶がメインの会があってもいいかなと。

そんな会があると若い方や近所の人が教会に来やすくなり、そこで繋がりが深められるのではないでしょうか。オーブンが動くのであればお菓子作りの会をして、若い方たちに教えるとか、日曜学校の子どもたちに作るところを見せて一緒に食べるという面白いプログラムもできますよね。またそのお菓子を持って教会の庭でお茶会をして、通る人たちに「来ませんか？」って声をかけるのもいいなと思います

ー 地域に根ざした教会でありたいということですね？

倉澤 教会は地域の中になくてはだめじゃないかと思っています。地域から浮いてしまうとどうしても力を失うのではないでしょうか。

ー たくさんの教会に派遣されたことはどう思いますか

倉澤 そうですね。主教から派遣され、数年経ってまた他の教会に派遣される。その時は「ここでみんなと引き離されるのは嫌だ」と辛い思いもしますが、次の場所で多くの人と出会い、よい交わりと経験をさせていただけるのは、お恵みだったと思います。

ー そういう意味でも神さまの人事だったんですね

倉澤 気がついたらここに導かれているという感じなので、出会いをくださったのは神様であり、聖職を志したのも神様のお召しという気がしています。

ー 司祭になり、これからの教会に思うところはありますか

倉澤 イエス様が癒しをして宣教されている時も、病人も治すけれどその周りにいる人たちの心も癒されました。それがあってはじめて病人も周りの人も本当の笑顔になることになるのではないかと思います。私たちも今苦しんでいる人を助けると同時にその周りも変えていかなくてはならない、そのようなことを皆さんと一緒にやっていくことが教会だと思います。

ー あと先生にお願いしたいのですが、心では思っていても感謝の言葉が足らないところと、説教で話を盛り込みすぎて解りにくいところがあるように思います

倉澤 自分では感謝を表しているつもりですが、私の課題としてしっかりと肝に命じます。

倉澤司祭とインタビュワーの皆様

聖職按手式—新司祭誕生・倉澤一太郎師

2015年1月31日東京聖アンデレ主教座聖堂にて

司式：大畑喜道主教　説教：高橋顕司祭

はじめまして!!

司祭　スティーブン・クロフツ

東京に来て約2か月たった今、多くの方々を知り、その役割を知り始めました。私自身の背景と私自身のことを話し、どうして私がここに来ているのかということをお知らせしたいと思います。

私はイギリスのカンタベリーからほど近い海岸地帯のマーゲイトで生まれました。カンタベリーにある本屋で短期間働きましたが、そこは中世期の素晴らしい門の前で、16世紀劇作家のマーロウがしばしば訪れていた所です。私は「自然」のすべてと私たちが住んでいる世界が大好きです。最初、科学者を目指しました。私の信仰と自然への愛着は、物事を科学的に見る方向に導きました。科学と信仰とは互いに近い主題であります。どちらも世界を眺め、それに畏敬するからです。科学はその畏敬に答えを求めますが，信仰は驚嘆するだけで満足します。科学の世界には神について多くの発見があり、私を驚かせ、神の道を追求し、また他人を導く行いを助けて下さることを知っています。自然、創造性、そして黙想の贈り物とが、私個人の信仰の大きな部分を占めています。私はこれらのことを、仕事に生かしたいと思います。

私は妻と3人の息子と共にここに来ました。またもうすぐ、もう一人の子供が生まれます。

妻のとも子は、神戸の郊外の生まれで、東京もよく知っています。彼女は室内改装の職業についたことがあり、いつかまた、その仕事に就きたいというのが、彼女の願いです。

私が司祭になる道程には、長年の東アジアの人たちとの関係がありました。ある日マレーシアの学生と会い、彼が中国人のクリスチャングループの会に招いてくれました。国際色豊かな学生、ドイツ人、フランス人、マレーシア人、日本人、中国人たちがいました。私はそのグループに奉仕することに喜びを感じ、その結果、外国からの留学生の世話をする大学のチャプレンの職を得ました。彼らと過ごした時間は大変楽しいもので、私は多くのことを学びました。

そのころ、私は日本の友達を訪ねる機会を持ち、その後亡くなった前の妻の家族を何回も訪れ、日本の教会で働くことを何とか可能にできないだろうかと思い始めました。

しかし当時は機会に恵まれず、イギリスで教役者となりました。聖職候補生になり、ようやく訓練が終わり、牧会するパリッシュチャーチを持つことになったその時、私の家族を大きな悲劇が襲ったのです。そのような大きい痛みのみが変化をもたらすことができるということは、しばしばあるものです。この変化は、新しい章を書くことを余儀なくさせるもので、日本において奉仕活動をする可能性について振り返る機会を与えてくれたのです。私はこの機会をいただいたことを喜んでいます。

英国教会から来て、日本聖公会で奉仕するということは、時間はかかるでしょうが、2つの管区の話題と活動の在り方を分かち合う事が仕事の一部になることを意味していますし、そうありたいと望みます。私はまたイギリスで行っていた創造的黙想の奉仕（creative meditative ministry）の一部をもたらしたいと思います。私にとってイギリスでかつての学生が敷いてくれた道を歩き続けることは本当に素晴らしいことです。この数か月間で、私は多くのことを発見し、皆様と共有したい多くの経験を持ちました。私を教区内で見かけた方は、ぜひ私に声をかけてください。

（東京聖十字教会勤務）

翻訳：広報委員　吉田昌夫

私たちの教会［１７］

ようこそ聖マルコ教会へ

私たちの長年の願いが叶えられ、聖堂が機能的に改築され、新たに信徒会館が与えられました。私たちにとって大きな喜びです。主に感謝です。私たちの聖堂は、元田稔氏の設計による歴史的価値のある木造建築です。

「木の温もり、優しい音響が全身を包み込む、愛着のある聖堂をこのまま残したい」との信徒の強い要望で、外観・内部ともに、これまでの雰囲気を残すことにしました。改築工事では、耐震補強を施すことにより、耐震強度が著しく向上し、丈夫な建物になりました。また、これまでの会館部分の間仕切りを変更したことにより、聖堂がだいぶ広くなり、新たにベストリー等もでき、さらに、旧ベストリーをサイドチャペルに改造しました。

そして、聖堂の向かい側に信徒会館を新築し、その外壁を聖堂と同じ焼き杉材にすることにより、聖堂と信徒会館の統一感を出しました。通りを行く人が興味を持つような、人目を引く斬新なデザインの会館になりました。

1月17日、聖堂改修及び会館建築竣工感謝礼拝が捧げられ、引き続いて同竣工感謝の祝会が盛大に開催されました。大畑主教が祝辞の中で、「聖マルコ教会は、『隠れキリシタン』をやめるそうです」とおっしゃいました。これまでは、敷地の樹木が鬱蒼として、通りから教会が見えにくかったからでしょう。当教会の前にある焼き鳥屋の店主から、「『あんなところに教会があったんだ』と、店の常連さんが話してましたよ」と言われました。目立たなかった教会は、人目を引く教会へと変身しました。

ところで、昨年の7月13日、東京教区教会建築委員会へ当教会の建築計画案を説明しに行った際のことです。信徒会館の明かり取り部分からの雨漏りは大丈夫か、また、建物の強度等に不安がある等の指摘が次々と出されました。なるほど、建物は台形であり、外観のデザインが奇抜だったからです。そんな中、「地域に打って出るんですね」の笹森司祭の一声で、委員会の空気が一変しました。

与えられた建物と抜群の地の利を活かしきって、これから、どうやって「打って出るか」、どのように宣教を進めていくかが、今後の課題です。

（クリストファー島崎 敏彦）

《信徒リレーエッセイ》

オルターのこと

目白聖公会　鈴木　良子

私がオルターの奉仕をさせて頂くようになって13年になりますが、まだまだ学ぶ事が多く、これで充分ということがないように思います。オルターの仕事は主として聖餐式の準備と片付けですが、準備が決められたように正しく出来ていないと、礼拝の流れが滞ってしまいますし、片付けがきちんと出来ていないと、次の礼拝の準備が正しく出来ません。礼拝中も、パンとぶどう酒は足りるか、何か手違いはないか、あればすぐに対処出来るように会衆席から司祭の手元を見つめます。

あまり人目につきませんが、礼拝に直接関わる大切な仕事です。一つ一つの仕事を落ち着いて間違いの無いようにしなければなりません。そして全ての作業が終わったとき、大きな安堵と喜びが与えられます。私はオルターの奉仕をさせて頂けることに感謝し、多くの人が関心を持ち、理解して参加してくださるよう願っています。

「芝公園の窓から」⑦

ある街にライバル関係の店があった。向かい合っている両店の2人の主人の関係はずっと前から非常に悪かった。2人は朝目が覚めてから夜寝るまで、どのようにすれば相手の店がつぶれるかについて1日ずっと考えていた。2人をずっと見ていた神様は1人に天使を送った。2人を和解させようと天使は提案をした。「神様はあなたに大きなプレゼントを贈ります。お金がほしければお金を贈ります。長寿がほしければ長寿を贈ります。子どもがほしければ子どもを贈ります。しかし一つの条件があります。」天使はしばらく沈黙した後、言った。「あなたが何を欲しがるかわからないが、相手はあなたが欲しがるものの2倍を得ることになります。あなたが、百万円がほしい場合百万円がもらえる。しかし相手は2百万円がもらえる。」天使は微笑みながら「もう和解してもいいのでは…。神様はあなたにこのように和解の方法を教えようとしています。」と言った。天使の話を聞いた一方の主人は「わたしが願うことは何でも叶えられる。しかも相手は2倍叶えられるということですね？」と確認すると、天使は「そうだよ」と答えた。彼は決心をしてこういうふうに答えた。「ではわたしの片方の目が見えないようにしてください。」

人生を歩んで行きながら誰かを憎んだことのない人はいない。何の理由もなく人を憎む場合は少ない。相手によって傷つけられ苦しめられた結果、相手を憎むようになる。憎む心は一瞬にして、心の平和を襲い、憎む心が生まれ、恐ろしいスピードで大きくなってわたしたちの心を支配してしまう。朝起きても、ご飯を食べても、仕事をしても、お風呂に入っても、憎む心ばかり、赦せない心で夜眠れない。

復活後、弟子たちに現れたイエスは語った。「誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」。このみ言葉は「深刻に理由、条件を考えないで執着せずに手放して」という命令であろう。イエスはご自分を迫害し、裏切り、十字架に付けた人々みんなを赦した。キリスト者が生きることは、繰り返しイエス・キリストによって受けた「赦し」に立ち返って、そこから生きることは何より大事なイエスの教えである。今すぐできない「赦し」、しかしわたしたちに与えられた復活後イエスが初めて命じられたことは「赦し」である。

（宣教主事　司祭　卓　志雄）

「青年会やってます！」

司祭　上田　亜樹子

毎月第4日曜日午後3時過ぎ、青年たちが三々五々主教座聖堂に集まります。今日のメニューはドライカレー。材料の買い出し、調理、その他の準備をするとあっという間に5時となり礼拝スタート。司式もお話も青年が担当します。礼拝の後はさっき作った夕ご飯で食卓を囲み、続いてその日のテーマに添ってディスカッションやワークショップ。発言するのが得意でない人も、初めての人も、一回きりの参加者も、それぞれのペースで話の輪に加わります。最初は好きな食べ物を語る事もありますが、やがて教会での疑問や思い、仕事や将来のこと、そしてこれからの自分や教会での課題、というふうに話題も広がります。18歳から35歳までという限定された時空間ですが、小さな子どもがいる青年も、見ていてくださる方が居るので思いっきり議論に参加できますよ。

◇　◇　◇

次回ペンテコステ号
5月24日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（十八）

1．教会的なたとえ

信徒A「ぶどう園のたとえ話で、朝早くから働いた人と、夕方から働いた人が同じ賃金をもらうでしょ」

信徒B「そうだね」

信徒A「それって納得いかないよね」

信徒B「でも実に教会的なたとえ話だと思うよ」

信徒A「そうかなあ」

信徒B「だって牧師も朝早くから働く人も、そうでない人も同じ給料をもらうからね」

2．トマスのような人

信徒A「お前はトマスのような奴だな」

信徒B「別にうたぐり深くないよ」

信徒A「ちがうよ、すぐ人の痛いところ、すなわち傷口に触れたがるからさ」

3．エマオ体験

信徒A「この間、聖書の“エマオへの道”と似たようなことがあったよ」

信徒B「何があったの？」

信徒A「友人と二人で歩いていたら、3日前に辞めた会社の上司とあって食事をすることになったんだ」

信徒B「それで」

信徒A「食事が終わって、支払いの時になったら、上司が消えていたんだよ」

夏の中高生世代キャンプ案内

テーマ：『大事なものって、なんすかね…』

日程：8月20日（木）～23日（日）

場所：日本バイブルホーム（群馬県みなかみ町）

問合せ：tokyo.camp2013@gmail.com

詳しくは各教会のポスターをご覧下さい。